

[論 文]

小説『マンズフィールド・パーク』とは何か？

What is this — Jane Austen's *MANSFIELD PARK*?

上 野 正 二

Ueno Shoji

はじめに

J・オースティンの『マンズフィールド・パーク』とは、如何なる作品であろうか。いまさら何かとぼけた問いを發するようではあるが、これ、オースティン作品に関しては、なお暫くは問い続けなければならない問であろう。それというのも、従来の研究をざっと見るところでは、そもそもこのような問いはほとんど何もしなされてはいないのだからである。何が問題なのかを問いもせず、誰か先行研究者の主張を鵜呑みにするようなものから、自分の予断を全く疑って掛かろうともしないものまで、その品多い業績の集積にもかかわらず、筆者にはほとんど信じられないような事態が、この「オースティン研究」の世界には見られるのである。研究論文のようなものがあれば、何でも手当たり次第に開いてみるがよかろう。野島秀勝氏の「ジェイン・オースティンの庭」をはじめとして、この国では『マンズフィールド・パーク』に関しても（『プライドと偏見』、『知性と感性』については既に論述済み）、本旨に拘わらぬ事柄をまるで重要事項でもあるかのように論じる論文ばかりである。紹介される海外文献もいずれも同様なのであるから。『マンズフィールド・パーク』といえば、どれもこれもがサザートン事件と田舎芝居事件がこの作品の結末を予め予兆したものだという言い分と、何でそうなのかは少しも語られずに倫理道徳性がこの作品のメインテーマだというものばかり。主人公のファニーは虚弱で内気な観察者だ、で終わりと来る。これらのカビの生えたと言ってもよい古い主張、ボコボコと舞い上がる埃を1つ1つ潰していったら、論者たちには口にすべきことは何もなくなるかのようなのである。

したがって、我々としては先ず右のような主張を潰すところから手を付けなければならないだろう。そうすると、きれいサッパリと片づいたところに何が残るかは、自ずから決まってくるだろうと思う。もっとも、1作品の位置取りを明らかにしようというような場合には、そんな1つの方法にのみしがみつかずに、むしろもっと多面的な批判的考察が必要となる。たとえば結論を先取りすることになるが、オースティン作品においてこの作品の持つ意義を論じるには、その先行作品および後続作品が如何なる作品であるかを知らずにはうまく行くはずがないのである。ただその場合、ほぼ同時に構想されていたと見られる『エマ』についてそれが如何なるものであるかを明示したものは、筆者の2年前に発表した「究極の『エマ』解釈?-----漱石『それから』」の他には筆者は知らないのである

が。

ところでまた、『マンスフィールド・パーク』を読んだならば（読んだと云えるほどに読んだならば）気付かずには済ませられない奇妙な点⁽¹⁾があるのだが、これを指摘している論文というのにお目に掛かれないのである。それは、先ず、倫理道徳を基礎づける次元の重要な思想が3箇所に分散して置かれているにも拘わらず、作家は筆にするにはするが深追いはせずに直ぐにその前後の意識レベルに立ち返って、そのまま作品を終わらせてしまうという点である。それはあたかも思わせぶりに、黒板にいたずら書きをして、舌を出してさっさと消してしまうかのようにも見える。それらは、第1に、第3巻14章の「目下の事態を有り難い恵みと感じさせ」(628)⁽²⁾、次に同じ第3巻15章の「この世のことだけを考えるなら-----かの最大の恵みは消えて無くなる」(642)、最後に同17巻の「この世では、罰と云っても、人が望むほどにはそうそう平等に与えられるものではない-----あの世のより公正な取り決めに敢えて当てにしたりするよりは」(681-2)という箇所である。これに類する思想は、前作の『プライドと偏見』に既に見られる。いな、『知性と感性』にも見られると言ってよいのである。しかしながら、上にも指摘したように、『マンスフィールド・パーク』は、大方の研究者には「道徳的な姿勢を明確に打ち出した作品」⁽³⁾、「人間の生活における道徳心の大切さを前面に押し立てた作品」⁽⁴⁾などとしか見え、それで終わりである。

文芸作品が如何なる性格のものであるかというのは、一応のことは、読めば分かる。この作品の場合でも作品の筋がどのように運ばれているか、あるいはある箇所を描くのにどのような材料が用いられているかは、余程の頓間な読者でなければ読み間違ふことはないであろう。だがそれだけでは作品が十分に読めたという訳には行かないのである。その箇所著者が何に拘り何を強調しているのかは、金鉞を採掘する者がやるように、著者の言葉突き砕き吹き分けて、さらに読者の心という溶鉞炉で鑄り出さねば、会得できない。

以下では、この作品に関して世間で横行している読み方を示した上で、先ず作品とのチューニング作業をかねて、筋読みによって何点かの重要箇所に関して、本来考察し読みとられるべき事柄を明らかにすることにする。そうすれば、通説ともなっている語り（騙り）を批判するのは、極めて容易になるであろう。同じく筋読みと言っても、やり方によっては直ちに深い思想史の世界に迷い込むことができるのである。このような作品の読み取り方からすれば、問題の3箇所の思想を理解するのに然したる困難はないはずである。

次に、このような作品であるにも拘わらず、この3つの箇所が含まれている後の第2巻、第3巻では（とりわけ）、作家はほぼ一貫して、そういう思想とは無縁の倫理・道徳性の次元で問題を作り上げ、解決しようとしているようにしか読めない⁽⁵⁾。言い換えると、作家は本来読者が読みとるべき事柄を押し隠してまで倫理道徳の問題を強調しようとしているとしか読めない。その点を浮き彫りにしておかねばならない。こうして、我々は漸くこの作品の位置取りを問うための材料が揃ったことを確認することができる。

最後に、もはや詰まらない事柄ながら、それでは作家は何故そのような振る舞いをするのか、この点を考察して終わりとしたい。

一、研究者たちの独断

筆者が参照した文献のうちで、それなりの説得性を（ということは、説得しようというエネルギーが第一だが）感じさせる論文は、2点である。惣谷美智子氏「オースティンの〈聖職拝受〉とヘンリ・クロフォード」⁽⁶⁾と、野島秀勝「オースティンの庭」⁽⁷⁾である。

惣谷氏はその論文を、マードックの「頑なな道徳的独断の指摘」から始め（262）、キリスト教という宗教と切り離すことの出来ない牧師職を問題に取り込みながらも（264）、ついにはその本体である神的なことがらには一切触れることもなくヘンリ・クロフォードという陰について無駄言を並べて終わってしまう。いま問題の〈道徳性〉に関しては、なお議論の余地があるとして保留しながら、ここにもモラリスト（人間観察者、人間性の探求者）の手になることは異論の余地がない、と述べている（277）。

野島氏の方は、シャーロット・ブロンテによるオースティン作品の「閉じられた庭」の指摘から論述を始める。彼自身その「閉じられた（心の）庭」の主張を以てこの論文を一貫させているのだが、それは彼自身が「人間が心を真に開く」とは如何なることでなければならぬかに関して、作家の意図を無視してまでも敢えて「近代の感情」（204）に執着することに起因していると言える⁽⁸⁾。要するに野島氏はオースティン解釈における宗教性の重要さを全く視野から外して⁽⁹⁾オースティンを批評しようとしているのであるから、作家の言い分は、本当に大事なところでの言い分は、何も彼の耳には入ってこないことになり、じっさいそのような論文になっているのである。

二、本来、この作品の解釈として語られなければならないことども

女性にしても男性にしても玉の輿に乗ること（elevation）は、小説にしても実話にしてもそれなりの面白さを世間に振りまくものである。小説の読者としては、或る者はそれだけでその主人公が幸福を手に入れたと錯覚し、主人公に替わって喜んだり羨んだりするかと思えば、或る者は別に世を拗ねたという訳ではなくても、それだけでは喜べもせず別の観点から主人公たちの幸福を判定してニタリニタリとするのである。

マンズフィールド・パークのトーマス・バートラムに美貌の故に見初められ玉の輿に乗ったマライアと、その縁故を活かして牧師夫人に納まった姉のノリス夫人と、縁故に背を向けてしがない海軍軍人との結婚生活に入った末娘のうちの、誰が誰よりもどのように幸福であるかを判定するほどの資料は、提示されていない。ただ、末の妹が子沢山であるのに対して、援助の手をさしのべるだけの余裕が上の2人にはあったのである。大姉は口を出すばかりで金もねぐらも提供することは拒むのであって、それだけでこの人物が嗤いの対象になるに十分な資格を持っていることは明らかである。サー・トマスが最も頻繁にからかいの対象になっているという論者も居ることはいるが、的外れであろう⁽¹⁰⁾。こういう嗤いや非難や、はらはらどきどきの小さな積み重ねが1つの小説をなすのであり、2つ、3つのビッグ・シーンによって作品価値が決まるなどというのは、論者の妄想に過ぎないのである。ここに10歳の主人公ファニー・プライスがマンズフィールド・パークに養われることになる。この家には上からトーマス、エドモンドの兄弟、マライア、ジュリアの姉妹が居て、ファニーはジュリアよりもさらに2歳下であった。ノリス夫人にとってはこのファニーは自分のお気に入りの2人の姪と同等の扱いを受けてはならない存在であ

り、またファニー自身はそのことをよく弁えていた。

(教育論) ファニーがマンスフィールド・パークに来た時、彼女が利口であるかバカであるかについて、まるで正反対になる2つの評価が行われた。筋読みの取り掛かり上、このことから始めよう。一方では「利口とはとても言えないが *though far from clever* 従順な娘」、「大バカ者 *prodigiously stupid*」(27) という見方で、この見方はサー・トーマス、ノリス伯母、それに二人の娘が荷担した。他方はエドモンドであり、彼は「ファニーが利口で物分かりがよく、思慮もあり、読書が好きなのを知っていた」(32) と記されている。この判断の違いはどこから生じるのかを見ておくことは、後々の考察に影響を及ぼす。

従姉妹たちによれば、ファニーは近代外国語が出来ないのを初めとして、地理の知識も歴史の知識も欠如している、音楽も絵画も駄目、ただ読み書きと裁縫だけしかできない。これらのことがファニー大馬鹿説の論拠だった。そういう従姉妹は「心の躰以外のことはあらゆることがきちんと教えられていた」(29) のだった。心の躰とは何だろうか？そのジュリアについて、すぐ後に「目上に対する敬意を失するような不作法はしてはならないと教え込まれて来たジュリアには、とてもその場を逃げ出すことなどは出来なかった。ところが一方では、高度な自制心、他人に対する思い遣り、己の心を弁える力、正邪の理念 *principle of right* などは欠けていたものだから、教育の本質的な部分 *essential part of her education* は何ら形作られておらず-----」(132) と記されている。オースティンの要求する〈教育の本質的な部分〉はそういうものなのだ。「己の心を弁える力」とは「自己認識力」、「正邪の理念」とは正しい悪いを決定する拠り所となる理念だと云い、倫理・道徳の拠り所なるものが考えられているのが分かるだろう。『プライドと偏見』のビングリー家での教育論議を思いだしてみよう。キャロラインとその姉にとっては女性の教養の必需要素はやはり外国語と音楽、絵画その他の手芸であった。こんなアレ、コレを修めなくてはならないのか、ソレが備われば全てが調う肝心のものが抜け落ちているのではないか、と問うエリザベスに対して、ダーシーは「広く本を読んで心を向上させることによって、もっと本質的なものを加えて行かねばならない」(第8章)、と答えている。

ポーツマスで(575) ファニーの教養は上流にも下流にも理解出来ないものであり、第3の教養とでも呼ぶべきものであることが示される。これもまた、ファニーにとっての教養の本質は一般人には理解できぬものであることを指し示している。

さて、ファニーの賢さを指し示すもう1つの要素がある。

伯父、サー・トーマスに対する畏れの気持ちは、古い倫理観、権威ある者に対する単なる恐れと思われがちであるが、ファニーにとってはそれだけではない。第2巻3章では「尊敬する人に対する当然の畏れが語られており、また自分の振る舞いの決定に関して適用すべき定り *a rule to apply to* として「伯父に対する畏怖の念」「伯父に対して無礼を働くことを恐れる気持ち」(634) が挙げられているのも、「自らの資格を低く見る」(30) というのも、従姉たちにはない徳であり、それは「真に畏れるべき者を畏れる」ことに究極する徳であった。これについては、古くから「主を畏れることは知恵の始めである」(箴言1.7) と書かれていることが対応する。

ここまで述べれば、それでは〈知恵の終わり〉はどうであったのかと興味を抱き詮索し

たくなるのが、筋読みを抜け出た読者であろうが、これについては「ファニーの自己離脱」の項に譲ることにしよう。

(結婚観) 長女マライアはノリス伯母の周旋により、サザートンの大地主ラッシュワースと婚約する。この男に関しては後にサー・トマスも驚いた大バカ者だとされ、マライア自身のたつての願いがなければ結婚は取りやめになるところであったのだが、何と云ってもバートラム家を凌ぐ財産持ちであった。マライアが彼に惹かれたのはただ彼が資産家であり、ロンドンにデビューすることができるという点であった。こうして、財産のある適齢の男は細君を探しており、教育のある適齢の女は結婚が唯一の賢明な身の処し方だという〈統計学的愚真理〉がここにも該当することとなる⁽¹¹⁾。

いよいよ結婚する段になると、マライアの心はラッシュワースには向いていない。それでいて敢えて踏み切るのは、何と！ヘンリー・クロフォードへの腹いせ(290)と自分を自由にしてくれない父親からの逃避(94)が理由であった。ヘンリー・クロフォードに関しては、どうか。彼も若くして既に2万ポンドの金と領地を受け継いでいる。しかも醜男。彼が醜男でなくなるまでの経緯は、次のように記されている。

「兄のヘンリーは美男子ではなかった。それどころか、最初会ったときは、黒髪のひどい醜男であった。それでも歴とした紳士で、物腰には好感が持てた。2度目に会ってみると、それほど醜男でもないことが判った。なるほど醜男なのは醜男なのだが、なかなか落ち着いたところがあり、綺麗な歯をしていて、体格も立派なので、こちらも相手が醜男なことをすぐに忘れてしまうのである。3度目に会ってからは、----もはや誰も彼のことを醜男だなどと言うことは許されなかった」(63)。

これはどのように読めばいいかというと、ヘンリーという男は身長が低かった(149)と云うだけでなく、やはり御面相も醜かったと云えそうである。ところが、男性の貌は規格でのみ評価が左右されるのではなく、この人間に関わろうとする者自身の目的によって、あるいは関係者の有用性によって、変わってくるらしいのである。マライア、ジュリアの姉妹にとっては、ラッシュワースには劣るにしても相当額(年収4000ポンド、173)の財産家であるヘンリー・クロフォードは札束に印刷される国王の貌にも匹敵する輝きを持って来る。それに加えて、この男には舌先三寸の芸がある。単に文章を爽やかに聞こえさせる芸術だけではなく、女心を擽るようなおべんちゃら屋の才芸があったと見ることができる。こうして、彼はめでたく醜男ではない男に変わってしまった。ただし、ファニーには彼はなお醜男のままである(70)。

ただし、「相当の財産を持っている独身の男性なら、きっと奥さんを探しているにちがいないというのが、何処の世界にも通用する普遍的真理である」(『プライドと偏見』冒頭)とはいうが、この男には通用しない。奥さんが必要なのではなく、遊び相手の女性が居さえすればいいのであった。この男がファニーを籠絡しようとして、自らがミイラ取りになる件については、項を改めて述べる。

ヘンリーの妹メアリの結婚観は、立場上兄とは少し異なるが、基本的には変わらない。要するに都会人として優雅に暮らしたい、というものである。そこでマンスフィールドに現れてからは早速バートラム家の跡継ぎトムに狙いを定めるのだが、彼がまるで振り返ってくれないことから、エドモンドに乗り換える。エドモンドは、牧師志願の篤実な青年で

あって、その彼がどうしてメアリーに最後まで拘ったのか理解できぬところが残る。彼女は醜男の兄とは違って、「生き活きとした黒い瞳、澄んだ小麦色の顔肌、どことなくただよう可愛らしい感じ」(63) がしたことは確かであろう。だが、エドモンドにとっては人生観の中心に座っている最も大事な事柄に関して、どうしても意見がすれ違うのであるから(聖職観)、恋愛論の常識としてこんな女性との間にまともな恋愛が成り立つはずはない、と思われるのである。メアリーの側からも、「エドモンドは普通の尺度で見ると限り決して愉快的な男ではなかったのだが、-----おそらく誠実で、落ち着きがあり、正直なところにある種の魅力があったのだろう」(96) と書かれている。「尤も彼女はあまり深く考えなかった。さしあたって彼は愉快的な存在であったし、自分の近くにいても良かった。それで充分だった」(同) と作家は云う。「あまり深く考えない」女性が、聖職観などで一応の応答をして相手をそれなりに釣っておくことが出来るものかどうか、問題だと思う。ただ彼女は、こと結婚にかけては「特に結婚と云うものが、あらゆる駆け引きの中で、相手に期待することばかり最も多くて、自分自身の正直な姿はなるべく見せないようにするものである-----」(66) という見解を抱いている。したたかな女性であるが、幸福には遠いのである。

主人公ファニーには既成の「結婚観」というようなものはない、と言ってもよいであろう。彼女にとっては、自分が予めどのような形の結婚をしようなどと云える身分ではない、と自覚していることがその理由の1つだが、もっと大事なこととして、それが彼女の世界観が〈閉じた庭〉ではなかったことと同一事であることを挙げねばならない⁽¹²⁾。彼女には結婚観が形成される前にいつの間にか従兄のエドモンドに恋心を抱いていたのであり、憎しみを感じているといってもよいほどの男に恋されてしまっていたのであった。この求婚に対する彼女の抵抗は、〈愛情〉が先立ち、互いに相手を気遣う者の間にでなければまともな恋愛は成り立たない、とするものである。重複を避けるために、後は(ファニーにおける愛情)の項に譲ることにする。

サザートン行き

マライアの婚約者ラッシュワースは、すでに知己の間柄になっていたヘンリ・クロフォードが庭園改築に造詣があるというので、サザートン・コートを手がけて貰いたいという希望を抱いた。それでクロフォードが下見に行くのを兼ねてマンズフィールドの一行がサザートン・コートを訪問することになる。

その準備段階で、ノリス夫人はファニーを除外した計画をそのまま実行しようとして、人を嗤わせる。「(ファニーを連れて行けという)エドモンドへの反対は、他の何よりも自分の計画に対する偏愛から出ている」(116) というのである。あのキャサリン・ダ・バーグ夫人と比べて力だけは劣るが人間の劣悪さ、自己(の計画)への拘りなどにかけては少しも引けを取らないこの伯母はこの作品では第一級の笑いの人である。だが、エドモンドの配慮でファニーも同行することになる。

(聖職叙任 ordination 問題)

エドモンドの「聖職叙任問題」は、作家がこの作品で書くことを予告していた問題であるが、研究者にはエドモンドとメアリーの関係としてこの作品の第1巻から第3巻まで一貫

した1つの主題となっているのが読めないらしい（マーヴィン・マドリック *Jane Austen* p.180、惣谷p.262）。この問題はファニーの次に述べる「自己認識」の問題と同様な静かな深みのある問題であることが分かる⁽¹³⁾。

サザートンのジェームズ2世の時代に作られた礼拝堂で、その本来の使用が途切れてしまったことを惜しむファニー（125）は、またエドモンドも、ある批評家たちによれば「伝統的価値に与する古い人間たち」に分類されてしまうのだろう。だが、新しい価値、ロンドンの価値観に与するメアリが古い因習に縛られない人間の自由を称賛して已まないのに対して、2人は「礼拝堂にいて頭が妄念で一杯だったりするような人が自分の部屋にいれば気持ちが集注するなんて思っちゃるんですか？」「一方の条件の下で自分と闘えないような精神なら、もう一方の所へ行っても、すぐに注意を集中出来ない理由を見付けるだろうと思うな。それにその場所の雰囲気と他人の例に倣うことで、始めのときよりもその人の気持ちが立派になると云うことはしばしばあることなんだ」（127）と云う。いま、下線を施した部分は、本来解釈を要する部分であって、別の箇所でもエドモンドが次のように述べるのが該当している。

「牧師という仕事は、個人的なものにせよ、この世のものにせよ永遠なものにせよ、人間にとって最も大切なものすべてを引き受けているんです。つまりは宗教と道徳、更にはそれらの影響力がもたらすところの態度振る舞いや礼儀作法と云ったものを守ることをね」（134）。牧師の仕事である礼拝に掛かる事柄は（無論箇々の人が礼拝するのだが）、この世のことである道徳からあの世のことである宗教にわたって〈人間にとって最も大切なものすべて〉に関わる、と先ず云う。だが、大事なものは態度振る舞い、礼儀作法という道徳に当たる事柄は、宗教のことがらが自覚された後に来るべき〈結果〉だということである。「僕は態度作法って云ったけど、むしろ行為振る舞い、或いは多分、正しい理念の結果 the result of good principles、とでも呼んだ方がいいのかも知れない」（135）。神と人間の関わりが教義的に理解された後に、初めてそれが振る舞いの善さを形成するのだ。倫理・道徳の事柄は人が至高善に向けて眼差しを正して後に初めて習慣形成の第一歩たる行為を形成するというのが、アリストテレスの徳論であった。

だが、この問題はここでは終わらないで、エドモンドの不決断の原因となる⁽¹⁴⁾。

（事件？）

屋敷を案内されたあと、一行は三々五々放任地（wilderness）からパークへと散策に移る。その際、ファニーはエドモンド、メアリの2人と出かけるが途中草臥れて1人パークの入り口で休んで2人の帰りを待っている。そこにマライア、ヘンリー、とラッシュワースが現れ、パークの入り口が施錠されているのに気づきラッシュワースが鍵を取りに戻る。その間に、密かに気心を通わせていた二人は隠微な会話を交わす。

「僕はこれほど愉しくサザートンが見られることは2度と再びないだろうと思っているのです。来年の夏になっても僕にとってはここは殆ど改良されたことにはならないだろうと思う」（143）。

また、マライアは「確かに太陽は輝いているし、パークは大変に気持ちがいい。ところが残念なことにあの鉄の門と隠れ垣が私に束縛と苦難の感じを与えますの。かの椋鳥の言葉どおり、まったくの籠の鳥ですわ」（144）、と云い、

「-----もしあなたが本当にもっと自由になりたくて、そうしたからって禁忌を犯したことにはならないと考えることを自分に許せるならば、(外に出ることが)出来るかもしれませんよ」(145)というヘンリーの誘いにのってしまふ。

こうしてマライアは、ファニーが怪我をするからと止めるのも聞かず、ヘンリーに助けられて垣根の隙間からパークに入り込み、2人連れだって去って行く。研究者によればこの〈事件〉は、この作品の結末として2人が(マライアはラッシュワース夫人という人妻の身であり、ヘンリーはファニーに求婚中でありながら)姦通し駆け落ちするという「おぞましい」事件を予兆しているとされる。

(ファニーの自己認識)

ファニーはエドモンド、メアリと牧師の仕事論を論じた時、牧師よりも軍人たちのほうが英雄的だというメアリの向こうに回し、グラント博士が牧師であることによって劣悪な振舞いをするのは、職業が牧師であるからではなく、むしろ牧師であり十分に「自分自身を振り返る」(163)ことが出来ることによって今日あるを得ている、牧師以外の職業に就いていたら一層悪くなっていたらう、と論じる。このいわば「自己認識」の必要性は、オースティンにおいてはどの作品にも出てくる大事な主張だと言えよう。

ところが、ファニーの自己認識論はそれに留まらない。むしろ「自己離脱」の主張まで行ってしまうことになる。エドモンドと一緒に窓辺に立って、ファニーは外の景色を眺める。「外の景色はすべてが厳かで、見る者の心を鎮め、素晴らしかった。雲一つ無い夜空の下にきらきらと輝いて見え、森の深い暗闇と対照を成していた。『ここには調和があるわ。それに静かな落ち着きも。ここにあるのはいかなる絵もいかなる音楽も手の届かないもの、詩だけがその姿を捉え得るようなものなんだわ。-----皆がもっと自然の崇高なことに注意を向けて、こう云う光景にもっと我を忘れて見入るようになれば、本当にそんなもの(世の中の邪悪、悲しみ)はもっと少なくなるだろうと思うの』」(164-5)。この「自己離脱」は、自己認識の高い次元として我々はこれを行為論として処遇することができるだろう。K・ヒルティの『幸福論』第3部所収「驚くべき導き」には、特別に物静かな人というのがやはり居るもので、彼らはその生活欲求のせいで積極的な活動に順応することができないか、ある程度以上は出来ないと思われるのだが、こういう人には〈内面的喜び〉への道が開かれている、と述べられている。なお、このようなことは、宗教に関しては語り得ぬはずの野島氏によって「-----そういう神はオースティンには無縁の存在であったにちがいない。彼女の世界にあっては、超越としての「自然」が排除されたとともに、超越としての神もまた不在なのである」(206)と記されている。おかしな事ではないか。

(家庭芝居事件)

バートラム家の長男トムは、一端の遊び人としてロンドンにも姿を現す人物である。彼の遊び仲間(作家は、「こんなものが友情と呼んでいいなら、友情によって」(176)と皮肉っている)がパークにやってきて、自分たちの劇をやる機会が潰されたことを蒸し返し繰り返し語った。マンスフィールド・パークの多くの者は自分でもやってみたくて、ついにはサー・トマスがアンティグアに居て不在であることを幸いに、演ろうという話がまとまって行く。エドモンドは、最初は本格的なことは出来ないから辞めようと言い、次には

1つには父が家を離れて危険な目に遭っているのに芝居をするのは不謹慎だという理由で、またもう1つにはマライアが婚約中という微妙な時期に大勢の若い男女が立ち交じるのは相応しくないという理由で反対する。だがエドマンドの反対を振り切って話が進むうちに、なかなか決まらなかった出し物が『恋人たちの誓い』という家庭劇には相応しからぬいかがわしいものに決定する。やがてメアリー・クロフォードが参加を表明すると（15章）、その相手役を近隣の青年にやらせようというのがよろしくないという理由で、エドマンドも参加することになる（224-）。

芝居といえば、昔から〈役〉になり切ることによって自己本来の人格（perosna）を殺すことを求められる営みであった。この芝居の場面の面白さは、その配役としてマライアとヘンリーが母と息子を演じながらも、互いに身体接触したいという生の人間の欲望を丸出しにしたり（247）、メアリー・クロフォードは役の上とはいえ、否、役の上だからこそやらねばならぬ役回りに躊躇いを感じる（246）、というところにある。

ファニー1人が、伯母や従兄トムに強く非難されながらも、自分の立場をしっかりと守り、自分の人格以外の音声表出を強要されることなく、ただ可能な限り皆を手助けし、皆のために役立とうとする。

序でながら、ヘンリーは後にパートラム伯母にシェイクスピアを朗読して聞かせたり、演説術の講釈をしたりして、多重人格を演じる素質が充分備わっていることを披露する。だが、それはまた彼の生に人格というものが欠損していることも示していると云える。ただし、この〈人格〉が真にソレとして語られるためには、人間の究極目的への到達をバックアップする力、神の恩寵によって授けられる〈対神徳〉の考察が不可欠となる⁽¹⁵⁾。

二つの事件に関する論者たちの見解

右に挙げたサザートン事件と家庭劇の2つのエピソードは、しばしばこの作品において最も「注目すべき」ものとされる。惣谷氏は「その理由は、まず第1に『マンズフィールド荘園』における象徴性がこれらのエピソードに収斂された観があるからである。そこでは、同一場面に主要登場人物がほぼ全員勢揃いし、以後、この作品世界で起こる出来事は、これらの中で、予め先取りするような形で暗示される。第2に、-----主人公ファニー・プライスが依然部外者の位置に据えられたままであることである。主人公が一見、〈はじき出されている〉観があるのは、いかにも奇異である」と言う⁽¹⁶⁾。下線部分は、必ずしも判然とした意味が取れるものではないが、サザートンの分に関しては大島氏の「ヘンリーとマライアの行動-----が作品全体に対して象徴的な意味を持っている」⁽¹⁷⁾と述べた主張は、言い分はすっきりしている。

この「サザートン事件」と「家庭劇」事件とで、「ヘンリーとマライアの行動-----が作品全体に対して象徴的な意味を持っている」と言う訳なのだが、この「象徴性」の主張は、つまり、2つのエピソードが後述の駆け落ち事件の象徴となっているという主張、は成り立つであろうか。筆者は〈否〉と言わねばならない。

もし仮に、マライアとヘンリー・クロフォードの駆け落ち事件がこの作品の主題となるほどの重要性を持っているのであれば、それを予め指し示しているような2つのエピソードは「象徴性」を喋々されるのもいいだろう。しかしながら、この作品では駆け落ち事件

は作品の筋として物語を動かす意味は担っているものの、それだけであり、作家がそれを主題に据えているというほどのものではない。ただ主人公ファニーの非難の対象を構成しているだけのことである。もし作品のキー・トーンが倫理・道徳性の強調というのであれば、その陰の部分を担当しているにすぎないのが、駆け落ち事件である。オースティンは『プライドと偏見』において見事に英雄的な人物を描くトラゲディアと劣悪で滑稽な嗤われるべき人間を描くコメディアとを一作品において展開した世界文学上極めて奇妙な作家である。しかしその作品においても、トラゲディアがあつてこそそのコメディアであつた、光は前者に当たっていた。

もし作家が主題を駆け落ち事件の方に置いたならば、物語の展開は自ずから別のものとならなければならなかつたであろう。つまり、劣悪者たちが主人公となり、その可笑しさを描くのを主眼としたであろう。しかし、そうはされなかつたが故に、劣悪者の嗤われる部分の詳細な記述には、「罪や不幸に関する長話はほかの作家達に任せることにして、私はそのような忌むしい話題からは出来るだけ早く離れようと思う。それほど落ち度があつた訳でもない人達には、是非ともみなそれぞれに或る程度の安楽を取り戻してやって、それから残りのすべてを締め括ることにしよう」（最終17章冒頭）としているのだ。オースティンの筆ならば、ヘンリー、マライアを幾らでも嗤えるし、そうする誘惑は強く働いたであろうに、そうはしていないのである。

（ヘンリー・クロフォードの恋）

サー・トマスがアンティグアから帰還すると、マライアがロンドンに向けて父から逃げ出すようにラッシュワースに嫁ぎ、ジュリアもそれに付いて家を出る。実の娘たちの不在で存在感の高まるファニーであるが、ヘンリー・クロフォードがこれを籠絡しようと企む。

それは一見おかしな言い分であるが、「健全な骨折りの精神 wholesome alloy of labour」（333）による「ファニー・プライスに僕に恋をさせること」であつた。これまで彼にとってファニーは「単に物静かで、控え目で、悪くない器量の娘だつた」のが「今や申し分なく綺麗」（334）だというのだが、それだけではない。おそらく、メアリが口にするように、「真相は、一座の中で彼女だけが兄さんの目にとまつた唯一の女性で、しかも兄さんはいつも誰か女性がいないと気が済まないたちの人だということ」（同）。それにファニーが彼に対して非難の目を向けるのが「得体が知れず」「言うことが分からない」女性であり、「私は貴方が好きではありません、断じて好きではありません」と言っているように見えるので、当にこれを「断じて好きにならせてみせる」（335）という気になるというのであつた。

やがて、ファニーがその兄ウィリアムと久しぶりに会って兄妹の情愛を籠めて語り合う様を見て、ヘンリーは彼女にこそ「本物の感情がある」（342）と評価し、「この若々しい、純朴な心の最初の情熱を呼び起こすことが出来るならば、それこそ大したものだ！」（同）と思う。その時には、もう彼は思っていた以上にファニーに心を奪われていた（同）のだ。こうしてヘンリーは「遊び半分のつもりで始めた」恋に、「まんまと捕まってしまった」（423）。彼が「何時あの人のことを真面目に考え始めたの？」（424）と問う妹に答えることが出来なかつたのは、このような次第であつたから、ここにあるのは本物

の恋の徴であると言ってもよい。だが、彼の場合には本物といってもあくまでも〈ただの狂気〉としての恋である。彼ら兄妹には〈神的狂気の恋〉（プラトン『パイドロス』参照）など存在し得ないのだった。

ファニーは、かつて見たヘンリーの不道徳的な振る舞いが鳴りをひそめ物腰もよくなった（337）のを見て、刺々しい対応は出来なくなったが、彼への軽蔑が無くなったのではない（337）。ヘンリーが善からぬ思いを抱いて始めた悪戯に自分が捉えられるまでの間には、というよりマンスフィールドでの舞踏会でファニーに最初の踊りを申し込んだ際でも、彼はファニー賛美者であることを周囲に示しはしたが（401）、ファニーへの積極的な言い寄りのようなものは見られない。

この舞踏会は、ファニーと踊ったことがないという、兄ウィリアムの発言から、サー・トマスが催すことにしたものである。この準備の過程で、メアリはファニーの人柄を理解することができなかったために、自分が兄から貰ったネックレスをファニーに贈り、兄の気持ちをあからさまに代弁して困らせている。

ヘンリーの恋はいよいよ決定的となる（第2巻12章）。求愛をしたらどうかと勧める妹に彼が述べたファニーの魅力は、容姿、上品な物腰、善良な心、優しさ、控え目なこと、優れた理解力、節操、それに節度があり信仰心を持っていること（principled and religious）にあると作家は書いている（426-7）。だが、この最後の2点を別にすれば、どれもが決定的価値とは言えないだろう。つまり、ファニーでなくてもいいのだ。こういうものによって「恋をする」というのは、いわば自己の想念に閉じ籠もることになる。開かれた心による恋というのは、価値に開かれた心の事柄なのである。そういうレリギアスなあり方-----〈開かれた庭〉はヘンリーのものではない（これについては、後述する「ファニーの愛情」の項を参照されたい）。彼には恋をしている自分の「思い」が価値あるものであって、他人は自分にとっては取るに足らぬ存在である-----who was everything to everybody, and seemed to find no one essential to him-----（cf.446）。これがヘンリー・クロフォードの自然であって、それはファニーによって「これ以上に不自然なことはない Nothing could be more natural」ものと看破される（同）。

ヘンリーが、ウィリアムの昇進に奔走してファニーに大きな恩を売りそれで愛情を買おうとするとき、ファニーが感じたのはこれであった。ファニーは怒りと屈辱を感じる（440）。

ファニーがエドマンドに恋をせず、ヘンリーの駆け落ち事件が生起せねば、ファニーは彼の愛を受け入れたらろう、という解釈者も居るが、そういう解釈は不可能である。マライアにコケにされたからといって、それで返報をしようという考え自体有徳な人間のすることではない。ファニーのヘンリー評は、「（ヘンリーが）些細なことで善くなっているのなら、重大なことでも善くなっているのではないか？-----」（601）などは、ずいぶん甘いものにまでなっているが、これ、ファニーの物思いの中で何らかの慰めを与えてくれるものではあるが、実際の観察などではない。ファニーの判断力は衰えてはいないのである。

(ファニーにおける愛情)

ヘンリー・クロフォードの求愛を拒むファニーに、サー・トマスはこの結婚はファニーにとって極めて有利な結婚であると説得をする。サー・トマスの結婚観はすでに娘のマライアの結婚の際によく示されている。相手のラッシュワースが「優れた若者でもなく、学識においても実務においても無知で、概して考え方も一定せず、どうやら自身そのことに気付いていない」(290)にも拘わらず、サー・トマスよりも大きな(55)、年に12000ポンドの収入(57)があることによって諦め切れなかった(292)。クロフォードの場合には、彼には人柄の点でも、物腰話しぶりからも、さらにはファニーの兄の少尉昇進のために骨折ってくれたという点からも(457)、これ以上の縁組みはないと思えるのだった。

ところが、当のファニーがどうしても受け入れない。サー・トマスは、これはファニーには免れていると思っていた「我が儘な気性とか自惚、或いは若い女達のあいだで昨今流行のあの精神の自由を求めるとか云う傾向」であり、彼自身に敬意を払わず、「物事を自分の一存できめてしまう人間である」(461)としか思えない。「君は自分自身のことしか考えない。だから、若いほせた心が想い描く、幸福にはなくてはならぬものとやらがクロフォード君には感じられないと云う」(462)。この結果は、ファニーの母親が選んだのと同様に、家族を経済的な水準を高めることから遠ざけることになる。サー・トマスは結局ファニーの判断力が病んでいるのだと見て、彼女をポーツマスの実家に帰し、惨めな生活を想い出させようとする(538)。

ファニーは、果たして自分さえよければよい selfish な娘なのか？⁽¹⁸⁾この問題を考えるときに、問題そのものをもっと明確にするために『プライドと偏見』のシャーロット・ルーカスを対置することが出来よう。エリザベスに向けられたコリンズの求婚を自分に向けさせたシャーロットは「世帯が持ちたいという純粋な私心のない欲望 pure and disinterested desire から彼をうけ入れた」(22章)と皮肉られているように、婚期を逸するのではないか、自分の下に弟妹が何人もいる家において自分が結婚すればそれは家族を経済的窮乏から救うことになるだろう、といった思惑まみれの wilfull な選択であった。いずれにしてもシャーロットの選択した結婚は、「男もあるいは結婚生活も重く考えず、結婚がずっといつも彼女の目的であった。高い教育をうけた財産のない若い婦人にとっては、結婚が唯一のあっぱれな生活の備えであり、幸福を与えてくれるかどうかはいかに不確かでも、欠乏からいちばん愉快にまもってくれるものであった」(同)のである。

ファニーがいう「幸福にはなくてはならぬもの」とは〈愛情〉であり、この点はエリザベスの主張に同じである。だが、ファニーの場合には、愛情のない結婚は邪悪 wicked ですらある(470)。どういう意味で、それほど重要なものとされるのだろうか。〈先立つべき愛情〉の欠落を盾にクロフォードの求婚を拒むファニーは、家族の者に対しては愛情が欠落していないと云えるのだろうか。ポーツマス帰省の計画が示されたとき、ファニーの思いは、「-----別離以来のあらゆる苦痛を癒してくれるように思われた」し、「家族の中心に立ち、かくも多くの親兄弟妹から未だ曾てなかったほどに愛され、不安も抑制も要らない愛情を抱き、自分もまわりの者達と同等であることを感じ、クロフォード兄妹のことは一切話題にされずに済み、-----」(539)といったことであった。だが、実際にポーツマスに帰ってみれば、母親さえも大勢の兄弟の中でファニーにばかり掛かりきりになる訳

には行かず、「殆どあらゆる点でファニーの希ったものと正反対であった」(567)。しかし、「ファニーは是非とも皆の役に立ちたかった」(569)。それは、「生家に対して超然としているとか、他所で教育を受けたため、生家の安楽のためには手助けする力もその気もまるでない、という風には何としても見られなくなかった」(同) というような見栄の働きのあったらうが、根柢には家族へのファニーの一方的な愛情があったのだ。そういうファニーが、クロフォードと結婚したら、弟妹にも、スーザンだけでなく皆に教育を普及させ、身なりも、食べ物ももっと良い物を提供することが出来たらう。こういうことを、どう考えるか、だ。

今、想像できることは、愛情が欠落した結婚は、『プライドと偏見』のシャーロットのような「家庭内別居」は極端だとしても、ファニーには耐え難いことであつたらう。何故か？親兄弟の昵懇の間柄を前提とする愛情は、ファニーの側からは発することは出来るとしても、その完成は相手の変化を要求するものであるから、ファニーの自由にすることが出来ない。また、クロフォードとの相思相愛の関係など、ファニーには恋愛論としても友情論としても、想像することすら出来ない⁽¹⁹⁾。というのも、優れた人間同士の優れた関係は、両者において卓越性が備わらなければ成立しないこと、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第8巻の説く通りである。ファニーが〈愛情〉を必要条件とするのは、愛情こそがそこからのみ人間の卓越性、完成が期待できる、いわば〈橋頭堡〉であるからだ、と思われる。この点で重要な文書は、第3巻5章にある。ロンドンに発つ前のメアリと最後の面談の場面。

「このあと暫くのあいだ2人は黙ってそれぞれに何やら考え込んでいた、ファニーはこの世の様ざまな種類の友情について、メアリーはそんな七面倒臭いことではなく、もっと気楽な事柄について」(524)。ここでファニーが考え込んでいる「様々な種類の友情」こそ、右のアリストテレス「友愛論」に出てくる、①有用性を目当てにする友愛、②快楽を目当てにする友愛、③無条件の善を目当てにする友愛、の3種類であることは容易に想像が付く。これを裏付けるのはメアリについての記述であり、作家は、“Mary on something of less philosophic tendency”と言っているのである。「メアリーが考え込んでいるのはもっと哲学的傾向性の少ない事柄についてであつた」。つまり言い換えると、ファニーは哲学的な傾向の友愛について考えていたことになる。「哲学者」といえば西洋では彼のことを指すアリストテレスの友愛論が念頭にあつたと言つて、少しも間違いはないであらう。

金銭はここでどれだけの働きが期待できようか？否、もっと端的な理由がある。ファニーが親兄弟のために経済的豊かさに流されない、端的な理由がある。それは、彼女が人間の「真の幸福」の所在を知っていたからである。それについては、次の第4節(1)を見られたい。ファニーには金銭では買えない真の幸福の源泉があつたのだ。

三、倫理的・道徳的な生き方の強調

以上見てきたところで、オースティンの提示する問題場面はいずれも世俗的な事態の記述としては、それだけでは解決のつかない場面であることが明らかであらう。だが、繰り返し断つておかなければならないのは、それは〈筋読み〉で満足しない読み方をする読者

においては避けて通れない明らかなさではあるが、誰もがそういう要求を持ち、そういう読み方をする訳ではないということである。それどころか、この作品ではオースティン自身がこのレベルの問題を考えていたのは明らかなのであるが、彼女は敢えてこの言わばレリジャスな問題次元を押し隠そうとしているのである。

第1に、ファニーと同じ種類の教養を持ち（というよりファニーを導いたとさえ言ってもあながち間違いではない）同じ行動様式を取るはずのエドモンドを、愚図の木偶の坊に仕立てること。

イ、メアリ問題、ロ、ヘンリー問題、

第2に、ヘンリー・クロフォードがファニーに恋をしてしまい、ごり押しを初めて以来、この作品は主人公ファニーの感情を移入して、クロフォードを人非人として非難するように読者を促すように出来ている。さらには、クロフォードとマライアの駆け落ちが露見して以降は、彼らの不徳を譴責する声で作品は溢れかえっている。今日の小説のように、ヒーロー、ヒロインの心情に立ち入って、墮罪がやむを得なかったものだなどと思わせる部分は何処にもない、と云ってもよいのである。

第3に、マライア、ノリス伯母に対するサー・トマスへの処遇が、オースティン作品の中でも珍しい、道義に適ったものであること。論者にはのんびりした人が多いから、こういう処遇は苛烈を極め最も厳しいものだなどという⁽²⁰⁾が、決してそんなことはない。作家は既に『プライドと偏見』で不幸な結婚を描いて見せている。そういうことを知っていて、しかも道義的な処遇を取らせてさせるところに、この作品で倫理・道徳を百姓一揆の際の蓆旗のように押し立てる作家の姿勢が読みとられねばならない。

第4に、既述のいわゆる〈3カ所の問題テキスト〉の問題

第5に、これは筆者の受ける印象というに留まるかもしれないのだが、第2巻の初めから本書の終わりまでは、サー・トマスの支配によって動いている世界だということ、そしてそのサー・トマスは謹厳実直な、道徳性によって動かされている人物だということ、を挙げる事が出来るだろうと思う。

アンティグアから帰った後のサー・トマスは、存在感を増していると言える。クロフォードを観察したり、彼の申し出を肯定してファニーの説得に当たったり、エドモンドを全く彼と同じ物の考え方をする人物とし、またバートラム夫人を教化し(653)、マライアの駆け落ちに対しては、彼の判断で全てが処理されているのである。この一々を引き合に出せば、その都度、厳格な倫理道徳の人が姿を現すのだ。

第1について

ファニーは、エドモンドの導きによって志操堅固な人間になった、と見る事ができるだろう。「引っ込み思案だけはエドモンド1人の力ではどうすることも出来なかった。しかし、それ以外の、ファニーの精神の向上を援け、愉しみの幅を拡げてやるという点ではエドモンドの心遣いはこの上なく重要な役割を果たした。エドモンドは、ファニーが利口で物分かりがよく、思慮もあり、読書が好きであることを知っていた。従って導き方一つでそのまま立派な教育になる筈であった」(32)と述べられている。この10歳のファニーに8年を付け加えると、既に見てきたファニーが出来上がる。引っ込み思案が謙遜・服従の徳

に繋がることは容易に想像できる。最後の最重要他者に関わる理解は、これは精神の向上としてエドマンズの援けに負うたものと考えることができる。彼の〈聖職観〉を見ると、牧師職が「個人的なものにせよ集团的なものにせよ、この世のものにせよ永遠なものにせよ、人間にとって最も大切なものすべてを引き受けているんです。つまりは宗教と道徳、更にはそれらの影響力がもたらすところの態度振る舞いや礼儀作法といったものを守ることをね」(134) と言い、エドマンズはファニーの全てをカバーするほどのそれだけ教養豊かな青年であった筈である。

イ、メアリ問題：ここには、この書物での宗教次元の話とその次元の押し隠しが、縮約的に見て取られねばならない

ところが田舎芝居事件でおかしな転進をしてみせるのを初めとして、メアリー・クロフォードに眼が眩んで（ハーブ搬入cf.84）から「魔法が解け、目が覚め」（664）るまでの彼には生彩がない。

たとえば、エドマンズは「聖職叙任と結婚という、一生の運命を決めることになる、真剣に考えなければならぬ問題」（369）で悩む。二律背反と言ってもよい問題となっている。なぜなら、職業として牧師職を選べば恋人のメアリはそれを嫌って去って行くだろう（直ぐ後に彼女は、牧師と踊ったことはないし今後踊るつもりもない、と言ってのけている（389）。し、彼女を選べば自分の人生の「形」をなすものが損なわれる。この大事な時に、メアリのことを「私慾を離れた愛情 disinterested attachment という点でも申し分のない人」であると思うかとおもえば、「自分にとって何が何でも大切だったものを諦め切れるほどにこのエドマンズを愛しているか？」という問いを繰り返しているといった分別と意志の宙ぶらりん状態にある。「私慾を離れた愛情」、いいかえるとファニーの見せた「自分からの離脱」は、宗教的な生の極意というべきものであり、したがってメアリがこれを持ち合わせている筈がないのである。〈自己の庭〉に閉じ籠もったメアリには！こういうことはあのエドマンズならば棄えていて当然のことがらであるにも拘わらず、作家は、このように原理的な事柄を眩ませてまで、エドマンズを木偶の坊 blockhead に仕立てているのである（392）。

また、ファニーの目を通して見るエドマンズ・メアリ関係（534-6）として、「エドマンズのおき感情とメアリーの悪しき感情が共に恋心に屈した」（535）。「メアリも愛しはするだろう-----」（535-6）といった件がある。ここ、明らかに作家の頭に真の友情論があると言わねばならない。つまり愛が単なる愛でなく、善を動機とする愛ならば-----そういう愛に成長させ得るならば、メアリーの愛はエドに値するだろう、というのだ。

だが、作家はそのような問題展開はさせない。決裂の場面までは、ひたすらエドマンズとメアリーの桎梏を「（職業の1つとしての）牧師志願の青年の思い」と「その職業を毛嫌いする女性の思い」の対立に仕立てるのである。その限り彼らを「古い伝統的・田舎的価値観の人間」と「新しいロンドンの価値観の人間」の対立として解釈する研究者たちの読み方も、まるで理由がない訳ではない。この対立は倫理・道徳という古い価値観が勝利して終わるとする彼らの解釈の全体は、見事にオースティンの術中に陥っているのである。そして、じっさいその決裂場面も、「根本的な物の考え方の欠陥 faults of principle」（664）というのは、当に倫理・道徳の根本に関わる問題であるにも拘わらず⁽²¹⁾、その

ようには読まれずに済むように設えられているのである。しかし、ここで立ち止まって念のために読み直してみよう。

ここは、「メアリの問題軽視 (661-3,666-9)」とラベルを貼ることの出来る箇所である。ひとは「罪悪観念の欠如」と読むかも知れない。しかし、じつは作家は罪悪という言葉を使っている訳ではない。

メアリの「根本的なものの考え方の欠陥」(664) -----これは直近の箇所だけでも2段構造になっている

(1) 純粹さの欠如 a. ファニーを賞賛しながら、バカめ、許さぬと言う。b. ファニーがヘンリーを受け入れていれば、ヘンリーはマライアと問題を起こさずに済んだ、と言いながら、精々年に1、2度の浮気で済んだ、と言う(663)。これらの点で、すでに根本的な欠陥である

(2) こんな考え方を不純として耐え得ぬエドモンドに対して、こういう純な感情のあることを知らない、あることを悟りもしないこと(思い遣りの欠陥664)。

こういう意味での根本的なものの考え方の欠陥である。

「宗教・信仰 religion」という語は『知性と感性』でも使用される大事な語であるが、この語を持ち出すことによって、この箇所が意味する事態の広がりも明白になるであろう。つまり、人間にとって最も大事にしなければならない2つのこと「隣人自己を含む人間愛」と「神愛」を想起しなければならないのだ。さしあたりここでは隣人愛が問題にされねばならない。愛という語は多発されても、中身が伴わねば空しい。それは上の(2)に関して、その人がいかなる考えで居るかに関心を示し、その正邪を問題にすることである。

「正邪を問題にする」といって堅苦しければ、「いかなる考えならばその人がまっとうな人間たり得るか」と問うことと言おう。言うまでもなく、これは(1)に関する「純な心」を有するということなのだ。ところでこの「純な心」は、エドモンドはファニーにはあるとするのだが、それは人が「自分がそうであろうとしている」というだけでは充実しない。「そうであろう」「そう」とはどういうことなのか、が問題なのだからだ。

かくして、問題はオースティン研究者の多くの者には霧中のことにしか思えぬような神学問題になっている。つまり「神愛」によって「隣人愛」が充実するのだが、この「一なる神を愛すること」の有無が心の純粹か否かを分けることになるのだ。一なる者に向かわない限りは、多に向かわざるを得ぬ-----純粹性は自ずから欠ける。もちろん、神を愛するとはいかなることであり、どのようにして実現するか、という立ち入った論は、ここではなされない。

□、ヘンリー問題：ヘンリーの問題に関してエドモンドがファニーを説得するに欠けているもの(505-)つまり、共生の鍵、宗教問題(511)

「私、宗教や道徳などの真面目な問題に関しては、あの方が正しい考え方をしているとは決して思いません」というファニーに、「あの男はそういう問題については全然考えたことがないのだというべきだ」(511)といい、これから恋の力を使ってファニーが彼を理想的な人間に導くべきだ(同)という。エドモンドが、メアリへの恋を貫けなかった理由は、まさにこれと同じく、メアリがこの真面目な問題に関して正しい考えをしていないこ

とにあった。つまり、共生の鍵とも宗教の鍵とも言える根源的存在に関する正しい考えの問題が中心に座っているながら、作家の筆がこれを無視させている、と言えるのである⁽²²⁾。

第2、第3、第5の問題は、詳論を割愛しよう。

第4の問題は次のようである。

四、3つの重要箇所の考察

これまでに見てきたように、オースティンの筆になるところでは何処も、少しつつけば神学問題に発展しないところがない、と云ってよいぐらいである。その極みが、次に示す奇妙な3カ所である。深い道德原理への思索が背景にあることは、明らかである。しかしながら、これらの3つの文書が置かれている文脈は異様である。作家は登場人物に嫌がらせを強いているかのように倫理・道徳的な主張を繰り返し、オースティン自身が自覚しているように面白くない文脈において、3つの文書はさり気なく⁽²³⁾記されているのである。

まず、それを文脈と共に示すことにしよう。

(1) 第3巻第14章の「目下の事態を有り難い恵みと感じさせ make her feel the blessing of what was」(628)：

この「目下の事態」とは、バートラム伯母にとっては長男のトムが落馬して死に瀕している状態である。メアリ・クロフォードのような軽率な女にとっては「気の毒な青年が2人減る」(630)などという不謹慎な捉え方をする場面ではあっても、家族にとってはとても「有り難い恵み」などという受け取り方はできないのである。それがどうしてファニーに掛かると「伯母に有り難い恵みと感じさせる」ようにするなど考えることが可能になるのか？この問題を解くには、同一作家の前後の作品に当たって、同種の見解があることを指摘することも意味のあることである。だが、それぞれの作品の主張は少しずつずれている。その都度、その文脈に応じた論点の掘り下げを試み、もし可能ならば、作家の念頭にあったと思われる思想を闡明する以外にはないであろう。

ここでは、この母親にとっての悲惨な状況を「有り難い恵み」に変える奇跡的な思想が求められているのだが、幸い我々の手元にはそういう場合に打って付けのものがある。「新約聖書」マタイ福音書第5章である。「幸いなるかな悲しんでいる人、彼らは慰められる」(5.4)である。なぜ悲しんでいる人が幸いであるのか。彼らは恵みをそれとして知らされるからである。心が希望や期待や幸福な思い出で満ち溢れている人には気付きにくいものがある。それは、「心の貧しい人」にとって極めて容易に近付けるのである。それと同様に、喜びに満ち溢れている人には気付きにくい悲しみに打ちひしがれている人には気付きやすいのである。フツウの状態では親は子供の成長に精力をつぎ込み、(自分の将来の安楽を彼らに期待するか否かは別に)そこに自分の生存意義を感じるのであろう。その場合、彼ないし彼女にとって、何が欠落しているであろうか。既に触れた問題に戻ることもなるが(自己認識)、自分がまるで勘定に入っていない。それはフツウには当然のこととされる。貧しい家族の場合にはさらに美談にさえなる。我が身を振り返ることなく、「親は自分のためには飲まず食わず着ず、子に注ぎ込む」というのだ。そのため

にしばしば彼らは幸いな状況に居ながら、幸せを取り落としてしまう。心が豊かになっているからである。したがって、そうではなく、精力を注ぎ込むべき子供がいまわの際にあるとき、子自身は親の頼むべきものではなくなっている。そして「自分自身の不安な気持ち」(621)が主題になり、自分が主題になる。「ああ、私は何という不幸な女なのだろう！」と。人の思いがそこに到達するとき、極めて稀なケースだが、「その不幸な自分でも、自分で自分を存在させているのではなく、存在させて貰っている」ことに気付くことがあるのだ。そこに気付いた人間には、この「悲惨な状況」が全く意味を逆転させて「恵み」として顕れる。トム自身にも比較を絶した善なる存在が常に随伴して、生かしてくれているのだし、自分自身だってそうだからだ。

もう1つ、思索の転回する可能性を挙げておこう。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れませんか。あなたがわたしと共におられるからです」(詩篇23.4)。ここでも、どのような悲惨な状況でも、天国においても地獄においても、比較を絶して大いなるお方が自分には伴っていて下さることが、示されているのだ。

ファニーは、伯母に本を読み聞かせることを通して、あるいは様々に話をすることによって、そういうことを実現させようという思いを抱いているのだ。

(2)次に、第3巻第15章の「この世のことだけを考えるなら----最大の恵みはたちどころに消えて無くなることだろう」(642)：

マライアの「姦通事件」に対して、当事者の両家族はそれぞれに別の男女と深い絆で結ばれているという状況の中で、ファニーにとっては「人間性がまったくの野蛮状態にでもあるのでなくては、どうして可能であるか」という「こんな恐ろしい罪の混乱、こんな淫らな悪の紛糾」(641)であり、サー・トーマスとエドマンズの2人に恐ろしい不幸を蒙らせることがら、「これまでのような道理に合った暮らしぶりは2人にも貫けないのではないかと思われた」(642)という。そこで、「この世のことだけを考えるならば、ラッシュワース婦人(マライア)の身内の誰にとっても、最大の恵みはたちどころに消えてなくなることだろう、というのがファニーの偽らざる実感であった」(同)と続く。これ「この世のことだけを考えるならば」という条件付きのファニーの感想だ、という訳である。すると、条件を解除したらどうなるか。実におかしなことに、誰もそういうことにまで思いが至らないのか、こんな問題に触れている見解には筆者管見にしてお目に掛かっていない。しかし、条件解除するということは、「ひっくり返せばネ、この世のことだけに限定しなければネ、ホントウの最大の恵みはネ、消え失せることなく存在し続けているのヨ」ということになる。そう言う外ないだろう。ただ、問題はそう云ってしまったところで、それは何を意味するのか?だ。その意味に気付かない者には、そういう条件解除の可能性にすら思い至らないで終わるのだが、すでに第1の問題点で考察したのと全く同様のモノの考え方が、ここでも通用するのだ。

「この世のことだけに限定しなければ」とは、どういうことになるだろうか。仏教の中でもキリスト教に最も近いと見なされている浄土真宗では今日では、弥陀仏はそれ自身は無分節の全体であり、それが主観と客観に分裂し、客観世界は主観の意識に対応して無限に分節する、と見ていると言う(梯実円「聖典による学び」(<http://access-jp.net/amida/monsi/kakehasi01/html>)。キリスト教でも神が、主観である人間の意識と、客観である意

識対象の世界を時々刻々に新しく創造している、と考えている⁽²⁴⁾。ということは、「この世のことだけを考える」とは、箇々の意識主体とその認識対象の世界だけを視野に入れるということで、それに「限定しなければ」とは、神の存在および神の恵みを受けている存在にまで目を届かせるということであろう。

つまり、ファニーという主人公は「この世のことだけを考える」方式も、「この世のことだけに限定しないで考える」方式も通用する女性だ、ということが前提になるのだが、後者の方式で考えるならば、この事件は、このおぞましい不道德事件は、見え方を全く刷新されると言うのだ（作家は、明示的には言わせないが、そういう意味になるのだ。そして、これが後に『エマ』の主題になる）。誰にも見え方が変わる、とは言えない。右に、ファニーはパートラム夫人にそういうことを可能にしようという思いを抱いていると述べた（このトロイの木瓜伯母にその可能性があるとは、筆者には思えないのだが）。だが、トーマス伯父にも困難であろう。してみると「最大の恵みが消えることのない」のは、ファニーとエドマンドの2人だけということになるだろう。

序でながら触れておく必要があるのは、この作品がソコで一貫させようとしている「倫理・道徳」の世界は、このように見てくると一層はっきりするのだが、神的な存在への開眼なくして考えられている世界である、ということである。本論ですでに述べたことだが、自己認識にしても友愛論にしても、それが十全な仕方で成り立つためには超越的な存在を引き合いに出さざるを得ない。徳の形成論、習慣論は超越者への志向（対神徳である〈愛徳〉）を必要条件として初めて成り立つのである。

（3）第17巻の「この世では、罰と云っても、人が望むほどにはそうそう平等に与えられるものではない-----あの世のより公正な取り決めに敢えて当てにしたりするよりは-----」（681-2）：

この箇所の全体を挙げれば「罪の片棒を担いだ男に罰が、社会的不名誉と云う罰がそれ相応に伴うのは当然だとしても、だからと云って、我々も知ってのとおり、それは社会が女性の貞操を守るために設けている防壁の1つである訳ではない。この世では、罰と云っても、人が望むほどにはそうそう平等に与えられるものではない。しかし我々としては、あの世のより公正な取り決めに敢えて当てにしたりするよりは、ヘンリー・クロフォードのような物の分かった男が少なからず苦悩と悔恨に嘖まれていることの方に眼を向ける方がよしかろう」である。

姦通事件の片棒を担いだヘンリーだが、彼はこの罪の露見によっては決して十分な罰を受けたわけではない、と此処では述べられているのだ。そういう不十分さがあるが故に、「女性の貞操を守るために設けている防壁の一つ」であるとも言えないのだ。しかしながら、「この世では、罰と云っても、人が望むほどにはそうそう平等に与えられるものではない」としても、「あの世のより公正な取り決め」によれば、まさに「平等」であると云わざるを得ないのである。ただ、此処ではこの第17巻の冒頭でいうだけでも「罪や不幸に関する長話」は早々に切り上げようというのであり、今まさに問題にしている作家の意図は「あの世のより公正な取り決め」を論じることであるどころか、それを押し隠そうとしているのである。それでもクロフォードにはこれだけの苦悩はちゃんとして回っているゾ、というのが、作家のこの部分での主張である。

それにしても、「この世」、「あの世のより公正な取り決め」という言葉は紛うことなくここに使われている。作家にはこういう言葉で以て語られる〈思想〉が間違いなしにあるのだ。この場合、「この世」とは、人間の主観によって分別される善悪の世界、勸善懲悪の世界と云ってよいであろう。勸善懲悪とは云いながら、世の力ある者は他人の物を奪って罰を受けないどころか、彼にとってそれが正義であり、力のない者は奪い取られてなおそれを訴えることによって罰を受けることにさえなる。世の賢者は力ある者に与し、かくて賢者は嗤い愚者は嗤われる。このような人々の間ではアリストテレスの文学論、なかんずく悲劇・喜劇論は成り立たないのであるが、あの世の公正な取り決めの領域ではそうではない。『プライドと偏見』のウィカム、『知性と感性』のウィロビーが、笑い物になるのは「あの世」の視点があるからであり、彼らはそういう意味で既に十分に罰を受けていたのであった⁽²⁵⁾。「あの世」とは、既に右に述べたように、この世のことだが神の支配をも視界に入れた世界である。すると天網恢々疎にして漏らさずとも言えようが、それよりも神の支配にまで眼が届いているほどの人間には肝心要の最高善は既に与えられている、平等に与えられているということを挙げねばならないだろう。

オースティンがさり気なく書き残している3つの箇所の意味するところは、以上のものであった。これほどの事柄を記しておきながら、何故に作家はさり気なく通り過ぎようとするのか、あるいはそれは押し隠そうとしているとさえ言える。何故隠そうとするのか？これは、もちろん言い表すのが困難というほどのものではないだろう。他の箇所がそうであるように、倫理・道徳問題を、主題として装うためであると言えるのだ。

結びに替えて（なぜ倫理・道徳問題を前面に押し出そうとするのか？）

その理由を示すのも、さして困難ではないであろう。『マンスフィールド・パーク』執筆中に構想され、実際に書かれた『エマ』との関連が問題である。『エマ』は、道義心を極端なまでに強調する作品であり、その終わりに「どんでん返し」によって道義心を越えた境位を示す作品である。道義心を越えた境位というのは、既に『プライドと偏見』、『知性と感性』でも論じられてきた事柄であるが、とりわけ『エマ』においてドラマティックな展開を見せる。この前作として、『マンスフィールド・パーク』では、道義心、倫理・道徳的な次元に主題を押さえに押さえしていると云うことが出来る。

この点を傍証する筋書きとしては、次のようなことを挙げる事が出来ると思っている。ヘンリー・クロフォードの所業は、いわば掠奪愛であるが、これがこの作品で非難の対象になるように、作家はサー・トマス、エドモンドなどを動かしている。つまり、倫理・道徳の次元である。何のためになのかというと、『エマ』でエマの所業を浮き彫りにするためである。エマがハリエットからナイトリーを奪う。これは2人が結婚に至る前のことであったが、倫理・道徳の次元では同じ事である。ところが、既に『マンスフィールド・パーク』で垣間見せている道徳の根源の次元では、価値観が転換するのである。これをもっと我々に見えるものにしたのが、漱石の『それから』であったのだ。-----だが、これについては先に一文をものしておいたことを繰り返し述べてきた。

2011.8.27

註

- 1、筆者にはどうしても見過ごしには出来ないのだが、どうも調子が狂ってしまうが、そういう事柄を問題として指摘する論者を捜しても見つからない。
- 2、引用箇所を示すこの数字は、中央公論社版、大島一彦氏『マンスフィールド・パーク』（中央公論社）による。従来、筆者は原典のページを示していたが、読者の利便を考えると既刊の邦訳に依る方が良くと判断した。
- 3、大島一彦『ジェイン・オースティン-----世界一平凡な大作家の肖像』（中央公論社）195頁。
- 4、中野康司『マンスフィールド・パーク』（筑摩書房）735。
- 5、賢いエドマンドを物分かりの悪い洩垂れ男に仕立てているのは、その最たる現れである。
- 6、『ジェイン・オースティン研究』（旺央社刊）所収。
- 7、『自然の自我の原風景・上』（南雲堂）所収。
- 8、そこでは、トリリングを引き合いに出して、この『マンスフィールド・パーク』においてオースティンその人が、近代という時代意識に逆らっていることを、指摘しているのだ。
- 9、そのような作業が何の意味を担い得るのか、その上での批評が何か積極性を持ち得るのか、筆者にはただの狂気としか思えない。
- 10、入野賀和子「『マンスフィールド・パーク』における秩序と再生」（本学紀要、第44巻所収）80頁。
- 11、言うまでもなく、『プライドと偏見』の指摘するところである。
- 12、こんな文章がある。The divinely-led man does not as a rule know very long beforehand what he has to do next or to what he will be called. K. Hilty, *THE STEPS OF LIFE: FURTHER ESSAYS ON HAPPINESS*, pp.225-6.
- 13、惣谷氏が触れているように、聖職叙任問題は影を薄くしているという面は間違いなくある。しかし、それはこの問題が表面上は次第に道徳問題に落とされてしまい、誰にでもは本来の問題が読めないようにされているということであり、それこそまさに本稿の主題に関わる。
- 14、作家はたしかに此处でこのような問題を考えていながら、この後エドマンドを愚者の見本のように仕立ててまで、以後は宗教の問題を隠してしまい、倫理・道徳の強調に走って行く。そこをよくよく検討しなければならない。
- 15、たとえば稲垣良典『人格〈ペルソナ〉の哲学』（創文社刊）23-4頁参照。
- 16、惣谷美智子、前掲書242-3頁。
- 17、大島一彦、前掲書203頁。
- 18、selfishであることを考えよう。野島氏によれば、ファニーの境遇は、マンスフィールド・パークから離れれば、あるいは「お針女くらいにはなっていたかもしれぬ」（228）と言う。そのファニーがパークに留まり得たのは「彼女の頑なな寡黙と沈黙」であり、それは彼女の狡知であると言う（229）。しかしパークに引き取られた幼少時はともかく、後には彼女はそれなりに必要に応じては立派に演説さえしている。

- 19、エドモンドがファニーに、クロフォードを感化し立派な人間にしてやれという箇所をみよ。ファニーはそんなことは自分には出来ないと否定している。511。
- 20、出典、中野康司訳『マンスフィールド・パーク』「訳者あとがき」741頁。
- 21、このことは、つまり根本が問われずには済まないことは、道徳の権化のようなサー・トマスにも後に気付かれる。「これが自分の教育方法の最大の誤りであったとは思えないような記がしてきた。もっと内面的な何かが欠けていたに違いない」(673)。しかしながら、彼にはその明確な意味は理解することができない。
- 22、ファニーの台詞回しも、しかし多くの読者には「宗教・道徳」として一括りにし得るものように描かれていると言ってもよいだろう。しばしば〈神〉もまた存在論的に正しい位置づけをされたものではなく、単なる〈閉じられた意思の対象〉でしかないのである。
- 23、オースティンは、『エマ』の出版に際してジェイムズ・クラーク宛て書簡で、「私が今もっとも心配しているのは、この4作目が、他の作品のよいところを帳消しにしてしまうのではないかということです」と述べ、『エマ』を「『高慢と偏見』を気に入ってくださった読者の方には機知が欠けているように見え、『マンスフィールド・パーク』を好んだ読者の方には分別に欠けていると思われるのではないかと考えます」と書いている(岩波書店、新井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』426頁)。この作品は、機知がどうであるかは別にして、分別くさい作品であることになろう。また、筆者の知るところでは、以下の3点に言及している研究書はないようである。
- 24、たとえばアウグスティヌス。拙稿「何を学ぶべきか」(創文社『教養の源泉をたずねて』参照)。
- 25、拙稿「『プライドと偏見』の人間理解」および「J・オースティン『知性と感性』の笑いについて」参照。